

札幌保健医療大学

2025年度 一般選抜入学試験後期日程

国 語

2025年3月12日(水)

1時限目 9:30～10:30

注 意

1. この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答時間は60分です。
3. 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
4. 問題冊子は1頁～13頁、解答用紙は1枚です。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。

一 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

電車の中で半数以上のひとが、だれに眼を向けるでもなく、うつむいて携帯電話をチェックし、指を器用に動かしてメールを打つシーンに、もうだれも驚かなくなった。だれかと「つながってほしい」と痛いくらいにおもうひとたちが、たがいに別の世界の住人であるかのように関心で隣りあっている光景が、わたしたちの前には広がっている。

いつごろからか、十代のひとたちが「キレる」という言葉を口にしはじめた。「腹が立つ」ではもちろんなく、「アタマにくる」でも「むかつく」でもなく、「キレる」。(a 苛立ち)の隠喩はついに身体から切り離された？

このように、「つながってほしい」という想いが一方にあり、「切れる」という行動が他方にある。ひとはどうして、そこまで接続／遮断に(b 拘泥)するようになったのか。まるでそれが(いのち)のスイッチのオン／オフであるかのように……。

だれかとつながってほしいというのは、じぶんがそのひとに思いをはせるだけでなく、そのひとにもまたいまじぶんのことを思ってくれているという、そういう関係のなかに浸されていたいということだ。

寂しいから、とひとは言う。だが、寂しいのは、じぶんがここにいるという感覚がじぶんがここにいるという事実の確認だけでは足りないからである。ひとがもつとも強くじぶんの存在をじぶんで感じることはできるのは、(c 褒め)られるのであれけな貶されるのであれ、愛されるのであれ憎まれるのであれ、まぎれもない他者の意識の宛先としてじぶんを感じることはできるときだろう。「ムシられる」(無視される)ことでひとが深い傷を負うのは、じぶんの存在がまるでないかのように扱われるからであり、じぶんのこの存在がないことを望まれていると感じるから、そういう否定の感情に襲われるからだ。だれからも望まれていない生存ほど苦しいものはない。老幼を問わず。

唐突におもわれるかもしれないが、近代の都市生活というのは寂しいものだ。「近代化」というかたちで、ひとびとは社会のさまざまな⑦くびき、「封建的」といわれたくびきから身をもぎはなして、じぶんがだれであるかをじぶんで証明できる、あるいは証明しなければならない社会をつくりあげてきた。すくなくとも①理念としては、身分にも家業にも親族関係にも階級にも性にも民族にも(d 囚われ)ない「自由な個人」によって構成される社会をめざして、である。「自由な個人」とは、彼／彼女が帰属する社会的なコンテキストから自由な個人のことである。そして都市への大量の人口流入とともに、それら血縁とか地縁といった生活上の②コンテキストがしだいに弱体化し、家族生活も夫婦を中心とする核家族が基本となって世代のコンテキストが崩れていった。さらに社会のメディア化も急速に進行し、そうして個人はその神経をじかに「社会」というものに接続させるような社会になっていった。いわゆる中間世界というものが消失して、

個人は「社会」のなかを漂流するようになった。

社会的なコンテキストから自由な個人とは、裏返していえば、みずからコンテキストを選択しつつ自己を構成する個人ということである。じぶんがだれであるかをみずから決定もしくは証明しなければならぬということである。言論の自由、職業の自由、婚姻の自由というスローガン²がそのことを表している。けれども、そういう「自由な個人」が群れ集う都市生活は、いわゆるシステム化というかたちで大規模に、緻密に組織されてゆかざるをえず、そして個人はそのなかに緊密に組み込まれてしか個人としての生存を維持できなくなっている。つまり、じぶんで選択しているつもりでじつは社会のほうから選択されているというかたちでしかじぶんを意識できないのだ。社会のなかにじぶんが意味のある場所を占めるということが、社会にとつての意味であつてじぶんにとつての意味ではないらしいという感覚のなかでしか確認できなくなっているのだ。そこでひとは「じぶんの存在」を、すこし急^せいて、わたしをわたしとして名ざしする他者との関係のなかに求めるようになる。すでに述べたことだが、わたしの存在は他者の意識の宛先となつていくというかたちで、もつともくつきり見えてくるものだからである。こうして私的な、あるいは親密な個人的関係というものに、ひとはそれぞれの「わたし」を賭けることになる。近代の都市生活とは、個人にとつては、社会的なもののリアリティがますます親密なものの圏内に縮められてゆく、そういう過程でもある。現代の都市生活者の存在感情の底にあまねく静かに浸透してきているようにおもわれる「寂しさ」、それが、いま、だれかと「つながっていたい」というひりひりとした疼^{うず}きとなつて現象しているのではないだろうか。ケータイはその意味できわめて現代的なツールだ。だれかとの関係のなかで傷つく痛み^{うづみ}のほうに、身体^{からだ}のフィジカルな痛みよりも、よほどリアルだという、そういう〈魂〉の光景が、そこに映しだされているようにおもう。

そのなかでひとがおそらく最初に求めるのは、じぶんが、あるいはその存在が「肯定されて」あるという感情だろう。

緊密に、そして大規模にシステム化された社会というのは、「資格」が問われる社会である。ひとびとの生活の細部まで支えているシステムを維持するために——食べるという、生きるうえでもっとも基礎的なことなみですら、飼育・栽培、製造・調理、流通・販売の複雑なシステムにそっくり組み込まれてしか成り立たなくなっているのが現代の生活だ——、それにふさわしい行動の能力が求められる。システムが複雑化するというのは、そういう行動能力の育成に複雑なプロセスが要するということでもある。つまり、教育課程が長くなるということ。今日では幼稚園に通う前から教育は始まり、そこから最低でも十数年教育は続く。

「資格」が問われるというのは、もしこれができれば、次にこれができる……ということである。そこでは何をやるにしても条件が問われる。そして条件を満たしていなければ「不要」^{不要}の烙印^{らくいん}を押される。「あなたの存在は必要ない」と。だから、じぶんの子どもが将来こういうみ

じめなことにならないように、親たちはぜひぶん幼いころから教育を受けさせる。「これをちゃんとやったらこんどの日曜日に遊園地に連れて行ってあげますからね」から「こんな点数をとるのはおれの子じゃない」まで、いろんな脅迫の言葉⁴を向けながら、だ。「もし〜できれば」という条件の下で、じぶんの存在が認められたり認められなかったりするという経験を、子どもはこうしてくりかえしてゆくことになる。じぶんの存在はひとに認められるか認められないかで、あつたりなかつたりする、そういうものなのだ、という感情を（e 募らせ）てゆく……。これを言いかえれば、じぶんというものに「なる」途上にいる子どもたちにとっては、じぶんが「いる」に値するものであるか否かの問いを、ほとんどポジティブな答えがないままに、恒常的にじぶんに向けるようになるということである。じぶんというものの「死」にそれとははつきり意識しないままにふれつつけるということである。

このような（f 鬱屈）した気分のなかで、子どもたちは何もできなくてもじぶんの存在をそれとして受け容れてくれるような、そういう愛情にひどく渴くようになるのだろう。つまり、なんの条件もつけないで、「このままの」じぶんを認めてくれる他者の存在に渴くということである。「できない」子どもだけではない。「できる」子どもも、あるいは「できる」子どものほうが言ったほうがいいかもしれないが、上手に「条件」を満たさなかに、もしこれを満たせなかったらという不安を感じ、かつそれを（かろうじて？）⁶上手に克服しているじぶんを「偽の」じぶんとして否定する、そういう感情を内に深く抱え込んでいるはずだ。

だから、子どもたちや十代のひとは、じぶんをじぶんとして「このままで」肯定してくれる友だちや恋人を、これまでのどの時代よりも強く求めるようになっていくらしい。だれかと「つながっていたい」という言葉もそこから出てきているようにおもわれてならない。じぶんを肯定できるかどうか、そのことじたいに大きな不安を感じているのが、いまの子どもたちではないか。大人たちが別の文脈から「つながり」の大切さを言うときには、いまの子どもたちの「つながっていたい」という気持ちの裏面にはこうした他者との遮断の認識が深くあることを見逃してはならないように思う。

（鷺田清一『感覚の幽い風景』による）

問一 文中（ ）部 a、f の漢字の読みを答えなさい。

問二 傍線部ア①の語句の意味として最も適当なものをそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

- ア「くびき」(① 固定された考え方のこと ② 複雑な人間関係のこと ③ 自由を妨げること
④ 封建的な言動のこと ⑤ 誤った先入観のこと)
- イ「理念」(① 理想的な考え方 ② 理論的な考え方 ③ 根本的な考え方 ④ 主観に基づく考え方
⑤ 現実的な考え方)

問三 傍線部ウ「コンテキスト」の意味を説明している語句を本文中から漢字二字で抜き出さない。

問四 傍線部エ「いわゆる中間世界」とあるがどのような社会をいうのか。最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① 「近代化」が実現するまでの過渡期にある社会。
② 社会的なつながりが親密で、自分との関係が実感できる社会。
③ 「封建的」な社会と近代的な都市生活が混在している社会。
④ 身分や親族、階級や性、民族に囚われない自由な個人で構成される社会。
⑤ 社会のメディア化が急速に進み、リアルな情報と個人が直接結びつく社会。

問五 傍線部カ「そういう『自由な個人』が群れ集う都市生活は、いわゆるシステム化というかたちで大規模に、緻密に組織されてゆかざるをえず」とあるが、具体的にどのように組織されていくことか。最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① 社会的なコンテキストから「自由な個人」として都市のシステムに同調し、緊密に連携して組織化されていくこと。
② 都市生活者が「自由な個人」として自らの役割を自覚し、ポジティブに選択し決定することで組織化されていくこと。
③ 都市生活者は複雑なシステムのなかで「自由な個人」の行動原理のもとに組織化されていくこと。
④ 「自由な個人」が群れ集うなかで自分は何ものであるかを証明することで社会的に組織化されていくこと。
⑤ 都市生活者は「自由な個人」として生きているかと思いがちだが、実際には都市の大規模で緊密なシステムの一部として組織化されていくこと。

問六 傍線部3「だれかとの関係……」（魂）の光景」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① ケータイなどのツールによって他者との関係が親密になり、自分の社会的な存在が明確になっていくこと。
- ② システム化された都市生活では、人間関係も緊密であることが求められるためケータイなどのツールでの意思の疎通が欠かせないこと。

- ③ 自分が社会的に必要な存続か否かをツールで確認することによって、自分の存在する理由が証明されること。
- ④ 身近で濃厚な人間関係がなくなり、自分の存在を自ら確認するために他者との関わりに強く反応せざるを得ないこと。
- ⑤ 社会から選択されているという意識が過剰なために、常に他者と連絡をとり合い精神的につながっていたということ。

問七 傍線部4はなぜ「脅迫の言葉」になるのか、その理由として最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① 将来の資格取得に向けて子どもが自らポジティブに力を蓄えていくことが望まれるから。
- ② 子どもに飴と鞭を使い分けることによって、ポジティブな態度と能力を引き出そうとしているから。
- ③ 成長過程や子どもの存在そのものよりも、社会から落後しないようにすることを優先して子どもを認めていくから。
- ④ 複雑にシステム化された都市社会に順応し認められるには、それにふさわしい能力や資格を得るための教育が必要だから。
- ⑤ 子どもの成長を期待するあまり、子どもの意に反して資格を得るための教育を受けさせるから。

問八 傍線部5「じぶんが『いる』に値するものであるか否かの問い」とあるが、なぜ子どもはそのような問いをじぶんに向けるのか、その理由として最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① 子どもとして、周りの人間に否定されず認められていくための方法を考えながら行動するから。
- ② 自己の存在が認められるためには、自分の周囲にいる人間からの評価が必要だから。
- ③ 周りにいる人間による評価がどうあれ、自分から積極的に認められる人間になろうとするから。
- ④ 周囲にいる人間による評価が繰り返されることによって、精神的な死に至るのではないかと不安になるから。
- ⑤ ささまざまな条件を達成することで周りから認知されたりされなかったりするの、生存する基本であるから。

問九 傍線部6「上手に克服しているじぶんを『偽の』じぶんとして否定する、そういう感情」とはどういうことか。その説明として最も

適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① 条件を満たす成果をあげられても、本当の自分が認められたとは言えないという気持ちになること。
- ② 条件を満たす努力を続けている自分を、自分の中にいる別人と認識すること。
- ③ 周囲からの過剰な期待に込えている自分を、つねに自分自身で叱咤^{しつた}激励しながら評価していること。
- ④ 期待された条件を達成しても、それは一時的な成果に過ぎないのではないかと感じること。
- ⑤ 「できる」子どもほど、周囲の期待に押しつぶされるのではないかという不安を内面にかかえていること。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお、問題の作成上、本文の一部が変更されている。）

「物まね」を（a 旨）とする（人）のサル的理性は、「まね」をするためのオリジナルな情報源を必要とする。そのため、何か新たなことを始めようとする場合に、すぐさまどこかに「習いに行こう」と考える傾向が強いようである。今日、あちらもこちらも各種の学校やスクールだらけになってしまっているのは、その需要を反映していることなのだろう。

もちろん、右も左もわからない状態において、専門家に「習う」というのは手っ取り早く確実な方法だということに異論はない。しかしながら、この「習う」ということには大きな限界と（b ヘイ害）があることも忘れてはならない。

まずは、「習う」という姿勢そのものに潜む「受動性」の問題について、はっきりと認識しておく必要がある。

どんなに素晴らしい教えが学校にあったとしても、それを「習う」ことで身につけることができる、と考えるのはあまりに⑦早計である。そのやり方で到達できるのは、最良でも指導者の「劣化コピー」のところまでである。指導者と同等かそれ以上のものを生み出すためには、やはり学習者のオリジナリティが欠かせないのだ。

そのオリジナリティは、学習者が能動的な主体になってはじめて生み出されるもので、「教えてもらう」ことを当てにしているような受動的な学習では、いくら年月をかけても「劣化コピー」の域を出ることはできない。

ずいぶん前のことだったが、世界的に高く評価されている日本人ピアニスト内田光子氏が、TVインタビューで、実にキツパリと「音楽を他人から『習う』なんて、信じられません！」と語っていた。「習う」ことがすっかり悪しき因習となっているクラシック音楽の世界で、そのように言い切っていたのは実に痛快で新鮮だった。

しかし、そうは言っても何かを始める時に、その世界の先達に「学ぶ」ことがどうしても必要なことも、もちろんあるだろう。そのような場合に、「習う」のではなく「学ぶ」ことはいかにして可能だろうか。つまり、受動的にならずに先達に「学ぶ」ためには、いったいどのようにしたら良いのだろう。

それには、「習う」のではなく「盗む」という心構えで（c 臨む）の良いのではないかと、私は考えている。（中略）

わが国では昔から職人や芸能の世界において、（d 徒弟）制度という形で、この「盗む」が「学ぶ」ことの本質であったらしい。辻本雅史氏の著書では、宮大工の西岡常一氏や三味線の鶴澤寛治氏の例が採り上げられており、「教えない」教育として紹介されている。

辻本氏は、「学ぶ」ことの基本は「見習う」ことにある、と述べている。「見て習う」のであって、弟子が受け身的に師匠から教えてもらう

ようなものではないのだ。「教える」という方法では、どうしても言葉で説明できるものまでしか伝えようがない。師匠は決して、順を追って方法を手取り足取り教えたりはしない。

宮大工の弟子ならば「木と対して初めて生まれてくる呼吸みたいなもの」がつかめるように、また三味線の内弟子ならば、師匠の食事の給仕をしながら「リズムや息づかい、そして心の動きまで、肌で感じること」ができるように、見習うのだ。このように、言葉で伝えようのない A を学ぶためには、やはり「教わる」のではなく、じかに見て「盗む」しかないのである。

現代ではこのような徒弟制度は、古臭いものと思われてすっかり隅に追いやられてしまっているが、このように「盗む」ことを教育の基本原理としている点ではなかなか素晴らしいもので、あらためて見直す価値のあるものではないかと思う。

学校というシステムがあらゆる教育に取り入れられ、今日ではどんなことでも(e コウ率)よく「習う」ことができるようになった。しかし、そこで伝えられるものは「劣化コピー」に至るマニュアルや知識に過ぎないという限界を、われわれは心得ておく必要があるだろう。そして、一見合理的に見える学校という近代的なシステムを(f 妄信)するのでなく、「盗む」ための場として捉えなおすことが必要なのではないだろうか。

学習者が、主体的に見習い盗もうと思っても、もちろん、それに足る師の存在がなければ始まらない。では、そのような師を選ぶには、どうしたら良いのだろうか。(中略)

「三年勤め学ばんよりは、三年師をえらぶべし」という古い格言があるが、やはり「学ぶ」に際しては、良き師を選ぶことは三年かかってもやる価値のある大切なことである。良き師と巡り合うことができれば、学ぶ側はおのずと師を「見習いたい」と思うだろうし、学習という行為自体が大きな喜びにもなるだろう。

師を選ぶことについては、「その道のことを何も知らない段階で、良い師を選ぶことなどできるはずがない」という意見もあるだろうが、私は、そのジャンルの内情やその道の①極意を知らなければ師を選べないということはない、と考えている。

まったくの素人であっても、自分が師と仰ぎたい人間について、ある程度の目星を付けることはできるはずだ。なぜなら、指導者を選ぶ際に必要なのは、詳しい専門的知識や内部情報ではなく、「心」が直観的に下すことのできる人間性についての判断だからである。

むしろ、多くの人が重要と考えている肩書や資格、経歴や流派等々についての情報は、「頭」²由来のノイズを強めるだけで、かえって無知である方が好都合と言えるかもしれない。直観の備える洞察力は、世俗的評価や肩書などによる判断よりも、本質的に、はるかに信頼できるものだからだ。

良き師には、二通りある。全人格的に魅力的であり、学ぶ者がそのすべてを見習いたいと思うほどの人物である場合と、技術や知識において優れた能力を備えた人物である場合である。

前者は、師の存在そのものが重要な「人間としての師」であり、後者はあくまで「技術上の師」である。しかし、三年かけても選ぶ価値がある真の師とは、あくまで「人間としての師」の方なのだ。

「技術上の師」の場合は、学ぶ側がその目的とする技術や知識を習得すれば終わりとなる期間限定的な師であり、学ぶ対象も部分的なものに留まる。しかし「人間としての師」との関係において、学習者は、目に見える上達やわかりやすい収穫を、焦って求めてはならない。学ぶべきは、決して表面的なところにある具体的な技法や知識ではなく、それを生み出す母胎となった師の人間性やその根本哲学である。だから、じつくりとその存在から影響を受け、その根本精神を「盗む」ことが大切なのであって、表面をいくらまねても意味はなく、むしろ有害ですらある。

そのような猿まねでは師の「劣化コピー」になるだけで、核心部の抜け落ちたものを教条的に振り回すことになりかねない。既存の宗教や学問・芸術の諸流派がしばしば嵌り込んだのは、この落とし穴である。（中略）

茶道や武道、芸能などにおいて技法やその精神を学んでいく際に、よく「守破離」ということが言われる。これは、学ぶ者が通っていくべき精神の過程を表した言葉で、この短い三文字には、人が学び、それを自分のものにしていくためのプロセスが凝縮されて示されている。「守」とは、師の教えや在りようを忠実になぞって習得する段階のことである。「破」はそこから一転して、師から学んだところを脱し、教わったことに縛られずに他流のものさえ自在に採り入れていく段階。そして「離」とは、もはや守でも破でもなく、いずれのものからも自由になり独自の境地に至る最終段階のことである。

しかし、現代人は学習というものを、とすると「守」の段階のみで捉えてしまっていることが多いように思う。学習者は、単なる知識や技術の習得に追われて、一通りそれらが身についたところで満足してしまうのだ。しかし、これは既存のものを仕入れ、まねただけであって、世阿弥の言うところの「無主風」³な状態に過ぎない。

また教える側が、生徒が「守」であること、つまり、自分の忠実なコピーになることを良しとしてしまうこともある。これは、生徒が自分の許を離れていくことを想定できていない関わりで、教える者自身が「守」の段階に留まっていて、「破」の意義や意味を体得していないことを露呈している。

しかし、「守」に徹すべき初期段階において、あべこべに（g カイ疑的）精神を発動してしまう学習者も困り者である。

これでは、本当のところが身につかず、誤った我流に陥ってしまう。カイ疑的精神の大切さを再三強調してきたことに(1)矛盾するように思われるかもしれないが、「守」の段階においてはあくまで、(hイ敬)の念をもって⑦愚直に師の教えを吸収すべき時期なのだ。どうしてもそんな気持ちを持てないとすれば、それは師の選び方を誤ったのかもしれない。真に学びたいのであれば、やはり、自然にイ敬の念をかき立ててくれるような人物を「三年かかって」探し出さなければならぬのである。

「守破離」の教えのBは、まさにこの矛盾と見えるところにある。

「守」にあつてはイ敬の念をもつて師を見習う必要があるのだが、「破」においてはそれを打ち捨てて、カイ疑的精神や(2)反骨精神によって師の引力圏を脱しなければならないのだ。そしてさらなる「離」においては、「破」において重要な役割を果たした反骨精神をも捨て去り、もはや師を反面教師として意識することもなくなる。そして「自分」とか「独自性」といったものへの執着も脱して、「自由」になつていなければならぬ。つまり、すっかり「破」の気負いが消えて、「自分」というクレジットを打つことにもこだわらず、「師」のことも忘れ去って、何者でもなく「ただ在る」という境地に至るものなのだ。

(泉谷閑示『反教育論』による)

問一 文中()部 a c d f の漢字の読みを答えなさい。

問二 文中()部 b e g h のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものをそれぞれ次の中から選び記号で答えなさい。

b ヘイ害 (① 新しい紙ヘイが発行された ② 横ヘイな態度 ③ 証拠を隠ベイする ④ 企業が合ベイする)

⑤ 経済が疲ヘイする)

e コウ率 (① ビルの耐震コウ造 ② 有コウ期限が過ぎる ③ 大都市近コウの農業 ④ 高度な技コウを使う)

⑤ 記録をコウ新する)

g カイ疑的 (① 街が破カイされる ② 奇カイな事件が起こる ③ 組織をカイ革する ④ カイ石料理を食べる)

⑤ 津波を警カイする)

h イ敬 (① 神仏をイ怖する ② 単イを取得する ③ イ業を成し遂げる ④ 誠イを尽くす)

⑤ 他国をイ圧する)

問三 太線部アウの語の文中での意味に最も近いものをそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

ア 早計 (① 軽薄 ② 迂闊 ③ 短絡 ④ 軽率 ⑤ 粗忽)

イ 極意 (① 奥義 ② 肝要 ③ 秘術 ④ 中枢 ⑤ 要領)

ウ 愚直 (① 本腰 ② 齷齪 ③ 一途 ④ 一辺倒 ⑤ 鋭意)

問四 空欄 A と B には次の中の同じ語句が入る。最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

(① 要点 ② 核心 ③ 限界 ④ 主眼 ⑤ 勘所)

問五 傍線部1「各種の学校やスクール」で習うとき留意することとして最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① 知識や技術を身につけるため固い決意が欠かせないこと。
- ② 「習う」だけでは十分ではなく、自らの工夫と努力が必要であること。
- ③ 受動的な姿勢で「習う」ことは、劣化という予期しない危うさが伴うこと。
- ④ 初期段階においては指導者の教えを愚直に守り、知識を吸収することに徹すべきであること。
- ⑤ 専門家に「習う」ことが確実だが、学ぶ側にオリジナリティが求められること。

問六 傍線部2「『頭』由来のノイズを強める」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び記号で答えなさい。

- ① マニュアルや技能的知識の習得は、計画的に習うことが大切だという考え。
- ② 経験と知識の豊富な専門家に学ぶことが最上だという考え。
- ③ 合理的なシステムである学校教育にも欠点や欠陥があるという考え。
- ④ 知識や技術を習得するには専門家や学校で習うことが必要だという固定的な考え。
- ⑤ 学校で「習う」とことと、師から「学ぶ」ことは基本的に異なるものだという考え。

問七 傍線部3「『無主風』な状態に過ぎない」とはどのような状態のことか。次の中から最も適当なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ① ひと通りの知識や技術を習得しても、「心」や「人間性」がともなわれない状態のこと。
- ② 技芸や精神が体得されていない段階で、必要な情報を忠実にコピーして「習う」状態のこと。
- ③ 教えてもらう側の存在から、主体的に自由に学んでいく状態のこと。
- ④ 学んだことを習得したと自己満足しているが、実は何も身につけていない状態のこと。
- ⑤ 「守」の段階から能動的に学習する姿勢が身についた状態のこと。

問八 本文の内容に合致しないものを次の中から二つ選び記号で答えなさい。

- ① 古くからある我が国の徒弟制度は懇切丁寧に教えるものではないが、その価値を見直し現代の学校教育に取り入れるべきである。
- ② 師を選ぶときに必要なのは世間の評判や肩書よりも、洞察力などの深い人間性を備えているかを直観的に判断する力である。
- ③ 良い師や指導者に巡り合うことができれば、「習う」ことの大きな限界とヘイ害に陥ることはない。
- ④ 「学び」の初期段階で師に力い疑心をいだくと本当のところが身につかないため、愚直に信じて吸収することが大事である。
- ⑤ 能動的な態度で師の教えを学び習得したあとに、その人独自のものを自分のものとしていくことが望ましい。
- ⑥ 「守」から「破」への段階では反骨精神を発揮して、師から学んだものを否定していくことが必要である。

問九 二重傍線部(1)「矛盾」とほぼ同じ意味の四字熟語を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ① 四面楚歌
- ② 羊頭狗肉
- ③ 荒唐無稽
- ④ 自家撞着どうちやく
- ⑤ 竜頭蛇尾だび

問十 二重傍線部(2)「反骨精神」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ① 何度失敗しても諦めない精神
- ② 同調や妥協、服従などを拒否する姿勢
- ③ 権力や時勢、因習などに屈しない気概
- ④ 自己の主張を最後まで曲げない強い意志
- ⑤ 不屈の精神で克服する努力